学級担任ってなんだろう ～民間企業から教員へ～

花岡　真由子（大田区立安方中学校）

本講義は，２部構成である。第１部では，「花岡はどんな人？」というテーマで，自分について振り返りをし，第２部では「担任を通して」というテーマで，今年度担任になって感じたことや悩んだことを考察した。

就職活動の時期になると，大半の学生が自分の進路で悩む。それまでに何か目標を見つけ，「夢」といえるものがあればいいが，特別な思いもなく，なんとなく周囲と同じように就活をする，という学生も多いのではないだろうか。自分のやりたいことも分からないままに就活をし，進路が決まり，そして大学を卒業し，社会人となる。実は，私自身がそんな思いを抱えた一人だった。大学入学時に教職課程に申し込みをし，教職課程の授業を受け，単位も取得していたが，「教員になる」という強い気持ちがあったわけではなかった。将来の進路の選択肢の一つとして，そして大学で取得できる資格の一つとして，なんとなく，教職課程を取った。大学３年生になり，自分の進路について考えた時，３つの選択肢が頭をよぎった。「教員採用試験に向けて勉強する」，「教員免許は取得するが，現時点で教員にはならず，一般企業への就職に向けて就活を行う」，「将来教員になるつもりがないのなら，教職課程はここで止め，就活をする」。教職課程を取得している友人の中にも，似たような考えで悩んでいる人が多かったように思う。

そこで私が考えたのは第４の選択肢，「社会人を納得いくまでやってから，教員になろう」というものだった。教員免許さえ取得していれば，もし今後何かあって「教員になりたい」と思った時，教員採用試験に合格をすれば教員になれる。自分の強い意志さえあればいつでも教員になれる，と思ったのだ。ただ，そこには問題もあった。５月に地元で教育実習を行わなければならず，約３週間就職活動が出来なくなる。そのため，４月末までには内定を取り，安心して教育実習に行きたいと考えた。５月までに決まるだろうか…と，とても不安な毎日を送っていたが，不安要素はそれだけではなかった。どうしても行きたい企業があるとか，したいことがあるというわけではなかったので，企業で面接をするたびに軸がぶれ，就活は大苦戦した。そんな状態であったが，無事に４月末に金融企業から内定をいただき，安心して教育実習を行うことができた。教育実習中は本当に大変で，平日は毎日２～３時間程度しか睡眠をとることができなかった（私の要領も悪いのだが，とにかく授業準備に時間がかかった）。それでも，教育実習中は本当に楽しく，教員もいいなと考えたこともあった。だが，「今じゃなく，いつかでいいや。」という考えは変わらなかったため，そのまま金融企業に就職をした。

１社目では，金融商品の営業職を担当した。お客様のお宅を訪問し，現在所有している商品のアフターサービスを行い，新しい商品の紹介や切り替え，最終的には新規契約を獲得する，という内容だ。上司や同僚にも恵まれ，ワークライフバランスも充実していた。しかし，その会社は２年半で退職をすることとなった。理由は「英語を使って仕事がした

い」と思うようになったからだ。外国籍のお客様の家を訪問したり，接客したりする機会もゼロではなかったが，年に１件あるかないか位で，勤務中に英語を使うことは皆無に等しかった。「なんで就活の時に気づかなかったのだ」と言われればそれまでだが，就活の時はそんなことを思いもしなかったから，仕方ない。その後，英語を使って仕事ができる企業に絞って転職活動をし，航空会社に転職をすることができた。

２社目では，毎日英語を使う機会があった。主な仕事内容は成田空港でのグランドスタッフ業務。チケットの発行や手荷物預かり，搭乗ゲートでの業務や到着時のクレーム対応など，多岐にわたる業務内容だった。働き始めた頃は「これで毎日英語が使える！」と思い，本当に毎日嬉しかったのを今でも覚えている。

転職してちょうど１年経ったころ，大きな転機が来た。新入社員の教育担当を任されたのだ。まだ２年目の社員であったし，自分の知識に自信もなかったため，「なんで私が…」という思いが強かったが，任されたからには精一杯やり遂げようと思い，快諾した。それからは，後輩たちの教育担当として，「どうすれば後輩たちが分かりやすいか，どうしたらしっかりと内容が伝わるか」を必死に考え，日々仕事を行った。「この子たちの未来は私の教育にかかっている！」と信じ込み，分かりやすいように図でまとめたり，実際にあったケースをロールプレイングしてみたり，とにかく後輩の教育に力を注いだ。

そんな中，自分にある思いが芽生えるようになった。「人に何かを教え，相手が理解し，分かった！という表情が見られることは，こんなに嬉しいんだ！後輩にもっと分かりやすく教えてあげたい！」という思いだった。今思えば，この思いこそが教員を志す原点だったのかもしれない。ほどなくして，「自分は人に何かを教えることが好きで，自分にも合っている気がする。引き続き英語を使うことができるなら，そろそろ教員を志してもいいかもしれない」と考えるようになり，通勤時間や休日を利用して教員採用試験の勉強を始めた。そして，転職して２年目の秋，無事期限付き採用として名簿登載が決まり，２社目も２年半で退職をした。

そんな紆余曲折を経て，社会人になってから６年目の春，晴れて教員になることができた。大田区立安方中学校の１学年・副担任・英語科だ。それまで「新卒で教員になる人が多い」と考えていた私にとって，６年もブランクがある自分がしっかりやっていけるのか，本当に心配だった。しかし，蓋を開けてみると，校内の英語科全員が民間企業での職歴有り。不安は一気に解消された。

教員生活１年目は，本当にあっという間に過ぎた。初めて教壇に立ったとき，40人弱の生徒の眼差しが一斉に私に向けられ，汗が止まらず，話す内容も飛んでしまい，本当に緊張していたことを今でも覚えている。教員１年目は覚えることも多く，毎日が全力疾走で本当にあっという間に過ぎた。

次年度，２学年副担任となった。副担任の仕事にもだいぶ慣れてきて，「自分が担任だったらどうするか」を考えながら仕事をしていたように思う。各クラスの学活を見学し，学年行事の際は全クラス応援をした。副担任の時しか得られないことをしっかりと学び，自分の今後に繋げようと考え，いろいろな経験をさせていただいた。そのお陰もあってか，

その年の３月末，人事異動が発表され，「１年２組担任」を命じられた時は，不安もあったが「やっと担任になれる！」という嬉しい気持ちの方が大きかった。

そして今年度，教員生活３年目にして初の担任となった私は，周囲の先輩，上司，管理職に様々なアドバイスや手助けをいただき，日々担任業務を行っている。そんな中で，副担任時代には分からなかった，担任ならではの悩み（考え）が見えるようになってきた。それは，大きく分けて３つ。「信頼関係の大切さ」「生徒理解と同時にクラスの秩序を守ることの難しさ」「特別扱いを好む」ということだ。ここではこの３点について，私が考える解決策を示していきたい。

まず，1つ目の「信頼関係の大切さ」について。

副担任をやっていた頃は分からなかったが，想像以上に担任は自分のクラスの生徒への指導が多い。もちろん，副担任の先生や他学年の先生方も指導することはあるが，自分のクラスの生徒に何かあったとき，真っ先に飛んでいくのも担任の大切な仕事であろう。しかし，毎日一緒にいる時間が長い分，自分のクラスの生徒指導には特に熱が入ってしまうことが多い。そして，そんな場面で戸惑うことがたまにある。それは「指導をすることで，この生徒との信頼関係が崩れるのではないか」という思いが，ふと頭をよぎることがあるのだ。「厳しい指導をする担任は嫌いだ」と，その生徒からそっぽを向かれるのではないか，それによって今後のクラス経営が上手くいかなくなるのではないか…この心配は，初めて担任になった先生が抱えやすい問題だそうだ。私も例外なく，その問題に悩まされた。

と，ここで疑問に思うのは，じゃあ，なぜ自分のクラスの生徒と信頼関係を結ばなければいけないのかということだ。もちろん，クラス全員と信頼関係が結ばれている状態は最高だが，煙たがられる状態でも，クラス経営がしっかりとできていれば，学級崩壊にはならないのではないか。私はその疑問を，尊敬する大先輩にぶつけてみた。すると，「信頼関係がないと，指導や助言をしても響かないし，反感を買うだけ。大人でも，もし，初対面の人に急に怒られたら，戸惑いと同時に相手に対して怒りが沸いてこない？」という答えが返ってきた。なるほど，そういうことか…妙に納得したことを今でも覚えている。信頼関係を築くことは，学校現場にとっていかに大切か，改めて気付かされた瞬間だった。

次に，「生徒理解と同時にクラスの秩序を守ることの難しさ」について。

学校現場では，色々なトラブルが起きる。そしてこれは実際に起こったケースである。自分のクラスに，精神的に不安定で気分の浮き沈みが激しい女子生徒（ここではＡと呼ぶ）がいる。ある日，その生徒とクラスの女子（Ｂ）がトラブルになった。トラブルの原因を作ったのがＡだったので，当然Ａに対する指導を念入りに行わなければならないのだが，ここで私は迷ってしまった。「もしＡに指導をして，精神的に参ってしまい明日から不登校になったらどうしよう。しかし，だからと言ってＡに対して甘い指導をしたら，Ｂやこの件を知っている周囲の生徒は納得しないのではないか…」Ａの生徒理解が深い分，どう指導したらいいのかが分からなくなってしまった。

この問題の重要なところは，Ａ・Ｂ・クラス生徒それぞれに丁度良い加減で指導をし，Ａに対してはＡへの理解も示しつつ指導を入れ，クラス内の秩序も守るということである。実際，生徒の数だけ指導方法があり，それぞれの生徒に合った指導をおこなうことも重要であるため，ＡにはＡに合った指導を行い，ＢにはＢに合った指導を行った。想像以上に，生徒は周りを見ているし，色々なことを知っている。今は中学生のほとんどが携帯電話を持っている時代で，四六時中情報共有は可能である。先生の耳に届いたころには，学年全員が知っていたというケースも少なくない。だからこそ，バランスよく個々に応じた指導で，全体の秩序を守ることも大切なのである。よく，学級経営を「縦の糸」と「横の糸」に例えることがある。縦の糸は，「安心・安全な環境，集団の秩序」，横の糸は「生徒理解・信頼関係」。縦の糸をしっかり張っておきながら，横の糸を上手に通していく。どちらかが緩んでいたり，曲がっていたりすると，綺麗にならない。そしてその絶妙な加減が，学校現場には求められているのだ。

最後に，「特別扱いを好む」について。

これは，私の前職にも大きく関わってくることなのだが，営業をやっている時，キラーフレーズと呼ばれる，相手の心を大きく揺さぶる言葉を教えてもらった。それは「あなただけ，特別ですよ」という言葉だ。お客様は，とにかく「特別」という言葉に弱かった。実際に特別な契約を行うわけではないのだが，「特別感」というものを感じてもらえるように，色々と工夫はしたつもりだ。「普通が良い，みんなと同じが一番」という考えが一般的ではあるが，心の奥底では「自分だけ特別扱いされたい」という思いがある人の方が圧倒的に多いように思う。

そしてこの考えは，まさに現職にも繋がっていた。担任の仕事の一つに，保護者対応がある。面談はもちろんそれ以外で相談を受けることもあるし，けがや病気の報告，生徒指導後のアフターフォローの電話など，様々な理由で保護者と接する機会がある。そして当然のように，保護者との接し方は，生徒との接し方と全く異なる。保護者は「大人」であり，人生経験もあり，善悪の判断もつき，ある意味教員と同じ立場にある。そのため，生徒と接するとき以上に丁寧に，相手への理解を示しながら接していく必要がある。そして何より，親は自分の子どもが一番可愛いし，一番大切だ。これは当然のことである。だからこそ，「みんなと一緒」よりも「うちの子だけ特別扱い」して欲しい気持ちがある（もちろん全くない保護者もいる）。実際，そういった依頼も少なくない。しかし，だからといってその生徒だけ特別扱いすることはできない。身体上の問題などで配慮が必要な場合は別だが，生徒は皆平等であり，公平性を保つことは絶対である。そのため，保護者に対しても，相手の気持ちを汲み取りつつも，平等に接していかなければならない。これも，我々担任の大切な仕事である。

担任の仕事は，本当に奥深い。だからこそ，日々面白いと感じる。自分自身少し遠回りはしたが，民間企業での経験も確実に今の仕事に役立っている。なぜなら，担任になって

感じたこととして挙げた３つの悩みは，全てが民間企業で働いていた時にも当てはまる内容であったからだ。「自分がしてきたこと，経験したことは決して無駄じゃない。」学生の皆さんも，ぜひ強くそう思って欲しい。今後，もし何か遠回りをしてしまったとしても，絶対に自分にとって大きな肥やしとなるはずだ。皆さんの将来が素晴らしいものになることを，心より願っている。